

## 「第一回聴覚障害者のための医療シンポジウム」

### 報告書

慶應義塾大学環境情報学部三年大木洵人 (Junto Ohki)

#### 1 目的

多くの病院では「患者＝健常者」という意識が根付いており、生命に関わる医療現場では、聴覚障害者への情報保障対策が深刻な問題となっている。例えば、医者が話すときにマスクを取ってくれず、意思疎通が出来ないなどが挙げられる。今回のシンポジウムは、研究者、医療従事者、聴覚障害者支援の分野でご活躍されている方々をお招きし、より専門的かつ実践的な観点から聴覚障害者医療の現状をお話して頂くことによって、より一層医療従事者や医療系学生の視野を広げ、今後の聴覚障害者医療の向上に寄与する機会を設けることで、聴覚障害者が直面している問題を解決し、暮らしやすい社会につなげることを目的とする。

#### 2 概要

場所：ハロー会議室Shibuya

日時：2010年2月11日（木）14：00～16：15

#### 3 趣旨（シンポジウムを行う目的、理由）

イベントの一つとして、8月に医療系学生を対象に、病院での聴覚障害者に対する対応方法を考える「医療系学生のためのワークショップ」を開催した。具体的には、聴覚障害者の方のお話を聞いたり、聴覚障害者体験を実施した後に、ディスカッションを行った。その際、診察室や待合室での対応方法に対して、聴覚障害者と医療系学生が意見交換や議論をする中で、専門家や実際に医療現場で働く方々の声を聞き、両方の立場より聴覚障害者の置かれている現状を知る必要があるということに気づき、今回のシンポジウムを開催するに至った。



今回のシンポジウムでは、実際に医療現場の最前線で聴覚障害者医療や聴覚障害者支援に取り組んでいる方々をお招きし、基調講演とパネルディスカッションを行った。基調講演では、医師であり『聴覚障害者のための受診便利帳』の著者でもある高橋英孝氏よりマクロな視点で聴覚障害者が置かれている状況をお話しいただいた。パネルディスカッションでは、基調講演を行っていただいた高橋英孝医師のほか、聴覚障害者の医療に関心をもつ医療関係者のネットワーク関東ブロック幹事である片倉和彦医師、聴覚障害をもつ医療従事者の会代表の真島昭彦薬剤師、全国手話通訳問題研究会東京支部「手話通訳あり方班」代表の江原こう平手話通訳士、そして、株式会社シュアール取締役副社長兼 COO の和田淳希氏にお越し頂いた。様々な立場の視点から聴覚障害者医療の現状について意見が交わされた。まずは「現

状を知る」ためにパネリストの方にはご自身の経験談や事例などをお話しいただいた。次に、参加者から質問内容を集め、その質問内容に答えながら議論を進めていくという形式をとった。

#### 4 成果

第一回聴覚障害者のための医療シンポジウムでは、46名の方に参加していただいた。参加者の中には、医療系学生や医療従事者だけでなく、様々な学部や職業の方から幅広く参加申し込みがあった。また、聴覚障害者や手話に造詣が深い人たちだけではなく、手話は全く知らないけれど興味がある方々など、非常に多様な層の方々に参加していただけたことが印象的であった。このように、多様性が確保されたことによって、シンポジウムで得られたであろう聴覚障害者に対する知識や理解が医療の分野ではもちろんのこと、日常生活も含め様々な分野で応用していただけるのではないかと考えられる。また、その分野が医療と融合し、将来、聴覚障害者に対する医療がより向上していく可能性も十分に考えられる。

今回、様々な分野でご活躍されているパネリストの方々に、ご自身が所属しておられる団体へ本シンポジウムの告知をして頂いたため、それぞれのメンバーたちが一同に集結した。今回のシンポジウムをきっかけに、普段は交流する機会の少ない団体の方たち同士が、お互いの活動を知り、情報提供し合うことができ、新たなつながりを作るきっかけの場にもなったのではないかとと思われる。

また、聴覚障害を持つ医療従事者をパネリストとして呼び寄せていたこともあり、今までは「聴覚障害を持つ患者の立場から通いやすい病院とは何か」ということに対して焦点が当たりがちだったが、今回は、「聴覚障害を持つ医療従事者という立場から働きやすい病院とは何か」ということを考える機会にもなり、非常に新しい切り口であったと考えている。

さらに、情報保障に関して、このシンポジウムでは手話通訳士4名と要約筆記4名と契約し、パネリストと会場の聴覚障害者に対して情報保障を行った。手話通訳士も要約筆記も、予想以上に人手がかかり、費用も高額であったということ、また、会場レイアウトや環境を整えることの重要性を改めて実感し、情報保障の大変さを感じた。

今回のシンポジウムによって、病院という施設はすべての人に必要な施設ではあるが、すべての人に開かれている施設ではないことを認識し、改善していかなければならないというメッセージを参加者全員で共有することができた。

#### 5 今後

今までは、専門的で実践的な知識を得る機会がない状態で、聴覚障害者に対する医療についてのイベントを行っていた。しかし今後は、このシンポジウムで得た専門的かつ実践的な知識や見解を基盤として、今後、聴覚障害者に対する医療を見直すためのイベントを企画・実践していき、聴覚障害者に対する医療の現状をこれからも多くの方に知り、考えていただく機会を増やしていきたい。このシンポジウムで発見することのできた問題意識をより一層掘り下げて今後のイベントに繋げていき、聴覚障害者に対する医療の現状を改善していきたい。

#### 6 謝辞

本プロジェクト実施において、シンポジウムのゲストの皆様、ご来場された皆様、ご支援頂いた皆様に感謝したい。本研究は、慶應義塾大学湘南藤沢学会と SFC 政策研究支援機構の支援のもと行われた。